

対馬歴史民俗資料館報

第 31 号
平成20年3月1日

編集・発行
長崎県立対馬歴史民俗資料館
対馬市厳原町今屋敷
郵便番号817-0021
電話 (0920) 52-3687
印刷所
長崎市出島町5番11号
平和堂オフセット印刷所
電話 095 (811) 4623



徳川家康公像（掛軸）万松院蔵



宗義智公像（掛軸）万松院蔵

二〇〇七年は、本館にとつて節目の年であった。一六〇七年、江戸時代の第一回の朝鮮通信使が来日してから四〇〇年目に当たるとして、朝鮮通信使は、「信（よしみ）と日本の友好を願い、一信（よしみ）を結ぶ使節であった。室町時代から来日するようになったが、豊臣秀吉による二度の朝鮮出兵により断絶した。日朝間の国交を回復するために、およそ十年の歳月を費やして実現した使節であった。

このとき、講和交渉に第一線でたずさわったのが、対馬宗氏（第十九代島主の宗義智公）であった。その交渉には血のにじむような苦勞があった。朝鮮国は講和の条件として、日本から先に国書を送ることをあげる。これに応じるために宗氏は、国書の偽造・改ざんという苦澁の選択をおこない、ついに通信使の来日を成功させたのである。

二〇〇七年は、本館の開館三〇周年にも当たる。本館は、対馬に残る歴史的文化遺産を収蔵し、教育文化の振興に資するため、昭和五十二年に設立された。現在、対馬藩宗家の史料（宗家史料）を七万点あまり収蔵している。



時と国境を超える信 館長 大森 公善

日本と朝鮮国との平和・友好のため、あえて「偽」を侵してまでも築いた「信」。日韓の軸に位置する対馬が、時と国境を越えて守り続けなければならぬ「信」。

それが「正しく、広く、永く」伝えていくことが対馬歴史民俗資料館の使命であること。二〇〇八年は、そのスタートの年。館の運営に多くの皆様のご支援とご協力を賜りますようお願いいたします。

島も瘠せたが
友も瘠せた。
魚型（いおがた）を削りながら
だまって 潮を見る。
だが おれには夢がある、
言いさして 友は笑う。
深夜 世界地図をひらく、
コンパスを取る、
島を軸に ぐるっと廻す。

宗家史料には、通信使についての記録も多
くある。宗家史料の一部は、韓国でも大切に
保管されている。

二〇〇七年、韓国からの来島者は、六万人
を超え、来館者も三万人を超えた。実に対馬
の人口の八割にあたる韓国の方が宗家史料を
目にし、「信」の大切さを心に刻み込んでい
る。

宗家史料は、日韓の歴史的「信」の結晶で
あるだけでなく、現在の日韓の「信」の絆と
なっている。

宗家三十五代島主 武志公が、新対馬島誌
に巻頭詩を寄せている。

県立対馬歴史民俗資料館三〇周年

記念式典

記念シンポジウムのようす

平成十九年七月二十一日(土)、対馬市において、朝鮮通信使の来日四〇〇周年と県立対馬歴史民俗資料館の開館三〇周年を記念するイベントを開催しました。ここでは、その様子を紹介したいと思います。

当日は朝からあいにくの空模様で、式典開催にあわせて来島される方々が搭乗する対馬ゆき旅客機の離発着があやぶまれましたが、大きくくずれれることなく、無事に記念式典やシンポジウムを行うことができました。



本館玄関前で行われたテープカット

午後一時から、本資料館玄関前において、特別企画展「対馬にのこる日韓交流の礎」展のオープニングセレモニーを行いました。

横田修一郎県教育長によるあいさつ
のあと、金子原二郎県知事、金賢明駐福岡韓国総領事、松村良幸対馬市長、横田教育長、大森公善本館館長でテープカットが行われました。



厳原中学校吹奏楽部による演奏

セレモニーでは、地元・厳原中学校吹奏楽部による演奏が華を添えました。

企画展は、朝鮮通信使に関する資料およそ七〇点を展示したものです。とくに当館が所蔵する「宗家文庫史料」の中から、「朝鮮通信使の華やかな行列を描いた『朝鮮国信使絵巻』(長崎県指定有形文化財)や、縦が二メートルを越える大型の絵図である「清水山城・金石城絵図」などの貴重な資料を出陳しました。(詳細は8・9頁をご覧ください)

午後二時からは、対馬市交流センター・イベントホールにおいて記念式典を開催しました。金子知事によるあいさつ
の後、金賢明駐福岡韓国総領事と松村市長から祝辞をいただきました。

次に、大森館長が「対馬歴史民俗資料館三〇年のあゆみ」を紹介しました。館長は三〇年前の開館当時を知る数少ない人物であり、資料館の設置にむけて地元の熱心な活動があったことを紹介しました。

会場では県立対馬高校の国際文化交流コースの生徒による韓国伝統舞踊の披露があり、客席からは大きな拍手が起こりました。

また会場ロビーでは、対馬高校および豊玉高校茶道部による呈茶の披露、華道部の生徒による作品の紹介があり、多くの方々に日本文化の紹介を行いました。



【上】対馬高校生による韓国伝統舞踊



【下】対馬高校、豊玉高校生による呈茶

記念シンポジウムでは、「日韓の架け橋・対馬」朝鮮通信使外交から学ぶ今後の対馬のあり方」をテーマにしたものでした。

まず、朝鮮通信使の研究で著名な仲尾宏京都造形芸術大学客員教授による基調講演が行われました。そのあと、仲尾教授の司会のもと、徐賢燮シールト大学教授ら六名のパネリストで、討論が行なわれました。

会場には、約五〇〇名の市民や中高生が詰めかけ、皆熱心に聞き入っていました。

関連イベントとして、対馬出身の写真家で記念シンポジウムにも参加された仁位孝雄氏の「朝鮮通信使の道」写真展も同時に開催されました。



仁位孝雄氏「朝鮮通信使の道」写真展



対馬高校生による華道作品展

朝鮮通信使四〇〇周年 記念シンポジウム

基調講演と記念シンポジウムの概要を掲載します。

基調講演

京都造形芸術大学客員教授

仲尾 宏先生

まず一つ目に云いたいことは、対馬という島の置かれている地位を見なおす必要があるということです。

現在の東京から見ると対馬は、日本の一番西北端に位置し、離島で辺鄙なところであるというイメージがあるように、太古の時代にも畿内地方、つまり飛鳥、奈良、京都などから見ると辺鄙なところだと思われていたかもしませんが、実は、朝鮮半島からの移住者、漢字、暦、仏教など



大陸からの文化は、この対馬を必ず経由し九州や畿内地方に伝わったので、つまり対馬は、文化伝播

の第一線であったと位置づけるべきです。だからといって中央と全く無縁な場所ではなく、奈良時代の万葉集には、対馬のことがうたわれていたり、平安時代には、菅原道真が生きていた時代以前につくられていた式内社が、たくさん残っていることなどからも中央とも深く関わっていたと思われます。

二つ目には、対馬の地形についてです。対馬は、平地が少ないために農業という分野では大変な苦労がありました。海は幸、山の幸に恵まれた島であり、また、朝鮮半島と九州北部に近いことから貿易や交易でくらしを立てる絶好の土地でありました。しかし、その反面、国境の島ということで攻撃を受けたり、豊臣秀吉の朝鮮出兵や日露戦争の時には、前線基地として利用されたりしたことも事実です。このような状況の中でも対馬は、戦争、紛争を回避して平和な島、安定した他の地域との関わりを続ける努力もしました。その努力のあらわれの一つが朝鮮通信使の来聘だったのです。また、朝鮮通信使外交の大きな成果の一つは、お互いに異文化を認め合って交流が行われたということです。通信使一行が日本にやってくることによつて人々は、刺激を受け、また朝鮮半島では見られない日本の独自の文化が直接朝鮮半島に伝えられたのです。三つ目は、朝鮮通信使のようすを



探る上で、重要な文書が宗家文庫史料であり、その資料が保管されている対馬歴史民俗資料館の役割

はとても大きいということです。資料館には、約十一万七千点ほどの資料が保管されており、その中には、宗家文庫史料が約七万二千点、地方文書などが、約一万三千点、考古資料が約二万七千点にのぼり、今後の日本や韓国、朝鮮とのかわりを調べていくうえでは、貴重な財産なのです。

最後に、朝鮮通信使縁地連絡協議会と朝鮮通信使文化事業団の果たした役割についてお話しします。この二つの団体は、市民が声をあげて組織されたもので、そのことに意義があります。そして、朝鮮通信使に最もゆかりのある対馬が、リーダーシップをとって活動が進められていることも意義深いことなのです。

以上述べてきましたが、今後日韓・日朝の友好のために豊かな歴史の宝庫である対馬の果たす役割は大きいということを確認していただきたいと思います。

記念シンポジウム



対馬日韓交流写真協会顧問
元対馬支庁長

仁位 孝雄氏

私は、韓国ソウルから東京、日光まで十数年をかけて朝鮮通信使の足跡を写真に収め、『朝鮮通信使の道』として写真集を出版し、日韓の各都市で個展を開催しました。写真を撮りながら感じたことは、各地で朝鮮通信使を中心にした町おこし、町づくりが盛んにおこなわれているということです。広島県の下蒲刈にある「御馳走一番館」という資料館には、朝鮮通信使を接待した時の七五三料理が再現され展示してありますし、岡山県の牛窓には、朝鮮通信使の影響を強くうけた唐子踊りが伝統芸能として伝承されています。兵庫県の実津にある「海駅館」では、通信使が食した料理を食べることが出来ます。また、一昨年の八月に韓国の忠州市に行きました。そこでは忠州市民の皆さんの朝鮮通信使にかける熱い想いを感じて帰ってまいりました。しかし、本家本元である対馬を見



韓国国史編纂委員会研究員

朴慶嬉氏

国史編纂委員会には、宗家文書が

た時に若干気になる事があります。その一つは、資料館施設のことです。厳原には、県立の対馬歴史民俗資料館、対馬市の郷土資料館、ビジターセンターの三つの施設がありますが、設備の面でいま一つの感があります。三施設を合体したような博物館、もしくは、資料館が必要ではないかと思えます。二つ目は、対馬藩宗家十万石の風情（石垣、武家屋敷、池、川など）を活用した町づくりが必要ではないかと思えます。対馬に十萬石の風情がなくなったら対馬の魅力は半減します。ぜひ、十萬石の風情を保存・活用してほしいと思えます。最後にもう一つお願いしたいことがあります。一九九〇年五月に來日した韓国盧泰愚大統領の宮中晩餐会のあいさつの中に登場したのが雨森芳洲先生ですが、実は、もう一人釜山訓導の玄徳潤の名前もありました。この玄徳潤が、今もって表舞台に登場していません。この玄徳潤をぜひ、対馬から歴史の表舞台に登場させてもらいたいと思えます。

約三万点ほどあります。宗家文書は、十九世紀の後半までに対馬、江戸屋敷、韓国釜山の倭館（和館）の三か所で作成された文書で、現在は対馬の歴史民俗資料館、国立国会図書館、東京大学の史料編纂所、慶応義塾大学、九州国立博物館の五か所に收藏されています。国史編纂委員会にある三万点の宗家文書について三種八冊の目録がつけられ、そのうち六五九三冊がマイクロフィルム化されており、一般に公開しています。

このような宗家文書ですが、私はこの文書には二つの意義があると思えます。その一つは、近世の日韓関係の歴史を研究するうえで一番大事で基本的な資料であるということですが。たとえば、朝鮮通信使の記録の中には、信使たちが書いた日記、記録類など、通信使と関係のある品物が数多くあります。これらの資料は、とても貴重なものなのです。二つ目の意義は、宗家文書のように対馬では膨大な文書がつけられました。それは、対馬が前近代において朝鮮国と日本をつなぐ役割を果たしたということですが。対馬の人々は、朝鮮国と日本を結びつけるために計り知れない努力をしたのです。それができたのは、朝鮮国と日本の両方を理解できる多様性、複合性があったからではないかと思えます。文化的にいえば対馬は、朝鮮の文化と日本の文化が交わり、混成の文化をつくる土台



対馬市文化財保護審議委員会委員 齋藤 弘征氏

があったからです。このような対馬とは、今後、通信使の研究などを提携してやっていけないかと思えます。

ここに一冊の日本史の教科書があります。私が高校三年生の時の昭和三十四年に使ったものです。近世江戸時代の対外交渉について「・・・わずかに長崎の窓を通して中国、およびオランダから世界の知識をえたにすぎなかった・・・」と記述されています。史実について誤謬の教科書です。そしてこれは私の長男が昭和五十六年に使った社会科の教科書です。やはり同伴について「・・・キリスト教を受け入れないオランダと中国（清）だけに長崎に限って交易を許しました」とあります。大変な間違いがあり、ここで対馬藩のことは何も書かれていません。次にこれは、現在の小学校の社会科の教科書です。「・・・朝鮮との貿易は、対馬（長崎県）を通じて行われ、将軍が替わると共に朝鮮からお祝いと友好を目的に五〇〇人も使節団が江戸を訪れ

ました。・・・」、さらに中学校の教科書には「対馬藩は、国交の実務を担当すると共に貿易を許され、朝鮮の釜山に設けられた倭館（和館）で銀や銅などを輸出し、木綿や朝鮮人参、絹などを輸入しました」と、やっとならぬと正しい歴史記述が登場するのです。以前の歴史教育では、江戸時代には、長崎の出島以外に外国との交流の窓口はなかったとなっていました。それが最近になってやっとならぬと、外国に通じる四つの窓があったということが認識されるようになりました。

特に対馬藩は「鎖国」といわれる江戸時代唯一の国家外交「日朝外交」の大役を徳川幕府に委ねられていました（だから厳密には日本に鎖国時代はなかったことになる）。朝鮮通信使が遺した記録には、対馬と朝鮮通信使の皆さんの交流が、親密で濃厚に、しかも好意的な文章で書かれています。第九次（一七一九）の製述官申維翰の書いた『海遊録』には、維翰と雨森芳洲の交流が深く描かれています。第十一（一七六四）の趙職という正使が書いた『海槎日記』には、佐須奈でサツマイモのタネを手に入れて朝鮮国に送ったということが書かれています。また、最後の通信使（第十二次・一八一）の柳相弼という武官が書いた『東槎録』には、この島に住んでいる人たちの心の優しさが描かれています。

ですから、こういった記録を読んで自分たちの郷土が担った国際的な交流の歴史や、地域に根づいた文化について再認識するとともに、教科書にはない生々しい国際交流の歴史というものを探っていってもらえればと思います。



姜 南周
朝鮮通信使文化事業会執行委員長

私の専門は韓国の文学です。韓国文学の基礎になる韓国人の考え方はどこにあるか、それを探すために二〇年間、韓国の南海の島々を巡りました。その関係で対馬にも訪れたこともあります。その年に偶然、福岡で朝鮮通信使縁地連の松原一行さんと会い、朝鮮通信使の話聞きまし。松原さんの話を聞いていて思ったことは、日本人の松原さんがなぜ朝鮮通信使に対してこんなに関心をもっているのかということ。これをきっかけにして、私も、朝鮮通信使に関心をもつようになりました。そして、二〇〇一年に釜山に朝鮮通信使文化事業会をつくりました。日本にはたくさんさんの朝鮮通信使の記録が残っていますが、歴史とは、過去の事実の記録です。大切なこと

は、過去の記録をどのように解釈しているかだと思えます。その感覚で私は、朝鮮通信使をどのように解釈すればいいかを考えました。その結果、私が考えたことは、朝鮮通信使行列の再現と韓国と日本の文化交流だったのです。

このように二〇〇年に及ぶ朝鮮通信使の平和的な文化は、世界的な記録だと思えます。国境をはさんで二〇〇年の間、戦争がなかった国はどこにもないのです。だから、私が今後考えていることは、朝鮮通信使のイベントを世界的なものにするということです。世界の中心地、たとえばロサンゼルスなどで朝鮮通信使文化事業をやってみるのはどうかと思っています。



伊藤 賢
県立長崎シーボルト大学教授
元駐福岡韓国総領事

私が、一九七六年に東京大使館担当書記官として勤務していたころはまだ日本と韓国は、いろいろな問題を抱えている頃でした。そこで私は、日韓関係をよくする為の方策があるはずだという前提でその事例を探し

ていました。そしてやっと見つけたのが雨森芳洲でした。そんな時に盧泰愚大統領の宮中晩餐会のスピーチを草案する仕事に出会いました。このことが日本政府を動かした大きな好機となったのです。

雨森芳洲の人物像は二つあると思えます。一つは、教育者で儒学者の雨森芳洲。もう一つは、江戸時代最高の朝鮮通の外交官としての雨森芳洲です。このように考えると、私は対馬出身者が釜山の総領事になるべきだと考えます。雨森芳洲の精神を継承する対馬の人が総領事になることだと思っております。では、どのようにしてなるのか、私のアイデアとしては、対馬高校を卒業して東京外大に進みます。そこを卒業すれば、外交官になる可能性は相当高くなります。そこで、東京外大に進学する人には、外交官になるための特別基金をつくるのです。そうすれば対馬出身の釜山総領事が誕生することになります。きっと、雨森芳洲は、あの世でどうして外交官が育たないかと嘆いていると思えます。念じれば必ず夢はかないます。



対馬市長

対馬市長

松村 良幸氏

町づくりの基本は、人づくりだと思えます。人づくりは、まず自分づくりだろうと思えます。それでは、自分づくりをするためにはどうすればいいのかということになります。交流をすることが自分づくりになると思うのです。たとえば人と人が出会います。そうすると習慣、文化、風習さまざまなことが異なります。子供の時から自分が思っていた常識が時折、全然違うという意識に変わるので。茶碗をもたずに食べることは行儀が悪いといわれる日本と全く逆の習慣をもつ韓国。これは、スプーン文化と箸の文化のちがいです。が、そういった習慣があるのだなどという事に気づきます。そのことによつて自分が自分自身に真摯に対峙するということが必要になります。それが自分づくりの原点となるのです。最もインパクトを与えるのは国内にいる人以上に、国が違い、心が違い、文化が違うという国際交流にこそ自分づくりのポイントがあるのです。仲尾先生もおっしゃったように地域づくりは、自分の住んでいる地域の自慢づくりではないかと思えます。

また、よくストレス社会であるといわれますが、九州北部と韓国の間位置する対馬は、そんなストレス社会の癒しの島づくりという観点で島おこしをとらえ、行動していくことが大切ではないかと思えます。

今回は資料館三〇周年を記念して、特別に、対馬藩宗家文庫史料をはじめとする文化財の保存のための資料館建設に尽力し、また開館後は館員としてその運営にあたられた永留久恵先生に当時のことをふりかえっていただいた。

宗家文庫収蔵までの経緯



永留久恵

はじめに

筆者は古文書の研究者ではないが、県立対馬歴史民俗資料館の建設から初期の資料館運営に関与した者として、今回「館報」の編者より、宗家文庫を館に収蔵した経緯について当時の情報を求められ、失念の多い老脳に今も忘れられない思い出を、ここに綴ってみることにした。

一 宗家文庫の存在感

陶山訥庵の名著『津島紀略』には、巻頭に引用書の目録を載せているが、それには多くの和書(旧事本紀、古事記、日本書紀以下五七冊の日本歴

史書)と別に、魏志、北史、隋書、宋史、元史ほか一〇冊余の中国史書と、三国史記、東国通鑑、高麗史、海東諸国紀、東国輿地勝覽、東文選など、多くの朝鮮史籍があることに驚いたものだが、それが御文庫の蔵書であったことが後でわかった。

その文庫には朝鮮書・中国書合わせて約三〇〇〇冊の漢籍があり、これには天和三年(一六八三)に書付けた目録もある。これを調査した中国文学者岡村繁(九州大学教授)は、この文庫本のなかに、現在中国には遺っていない中国本や、韓国には現存しない朝鮮本があることを、講演のなかで述べられた。

これは対馬藩の文庫が並大抵のものではないことを示されたもので、その時思い出したことは、文化八年の朝鮮通信使が上呈した其の国書に、林大学頭以下幕府の儒官たちが解しえない字句があつたのを、対馬藩の真文役(外交担当の儒者)川辺清次郎が、それは中国の故事であることを出典まで示し、「江戸にない学問が対馬にある」と称賛された逸話である。

徳川幕府には外交を担当した役職はなく、朝鮮との交渉は対馬藩に托したので、対馬藩には「朝鮮方」と呼ばれる役向があつた。数名の真文役は特に、外国と交渉するためその国の歴史や文化を一通り識っていなければならず、朝鮮だけでなく、中

国の故事をも履修していた。その学習のためにこの御文庫が存在した意義がよくわかる。

この文庫には漢籍のほか多くの和書もあるのは言うまでもなく、この書籍とは別に、藩政の日記、記録、書簡、絵図など、藩政の重要な史料があり、それに宗氏の家具類や美術品もあつて、それを分類すると、(1)奉書類、凡そ一万三千点。奉書とは、幕府より対馬藩主に宛てた書簡で、外交上の指導が多いとみられているが未調査。

(2)印章類、三七個。これは図書と称した朝鮮通交の特権を示す銅印・木印の類。

(3)漢籍、凡そ二八〇〇冊。(津島紀略)や朝鮮通交大紀に引用した書もこの中にある)

(4)和書、凡そ二七〇〇冊。

(5)日記類、凡そ三四〇〇冊。各役向ごとに一年分を一冊に綴じたもので、分冊すると四万冊程。

(6)記録類、凡そ二万二七〇〇冊。

(7)書簡類、凡そ三万九九〇〇点。

(8)絵図類、凡そ二六〇〇枚程。と大別されるが、これが廃藩後に減少した状況を次に述べる。

二 廃藩後の宗家文庫

藩政時代は御文庫番がいて、嚴重に管理されたものだが、廃藩後はこれを利用する向もなく、宗氏が東京

に出てからは、宗氏の代理人が管理されていたが、その頃漢籍の目録に、「御本家送」と欄外に朱筆で記入されて、文庫には現存しない本がいくらかもある。これは本家(宗重望侯の代)に送ったものだが、この本家送と別に、大正一五年(一九二六)には、朝鮮総督府が宗氏より多くの文書を買上げている。それは書簡類の中にあつた朝鮮国書契(外交文書)で、現在は韓国国史編纂委員会に大切に保管されているが、これと一緒に多くの絵図類も渡っていたことがわかった。

また前に挙げた印章が現存しないのは、それが朝鮮通交の図書(通交の書簡に捺した銅印)とみられていても所在不明だったのが、近年どこかで発見され、これが国書の偽作に用いた偽印とわかり、国の重要文化財として太宰府の九州国立博物館に展示されている。

明治初期の廃藩後、対馬では田舎侍は動かないが、城下の土族は島外に出て行った者も多く、文庫の存在に関心を持つ人はしだいに少なくなつた。その頃(大正昭和前期)、文庫の維持管理に献身的奉仕を尽くされた内野久策・津江篤郎父子二代にわたる御苦労に対し、文庫に出入した研究者は感謝しても、一般の島民は文庫の存在すら知らない人が多かつた。

三 県立資料館に

永久寄託されるまで

宗家文庫が有名になったのは、八学会連合対馬調査団の研究者が来島して、文庫の存在が報道された昭和二五年以降のことである。

その後歴史と文化の貴重な資料を大事に保存し、研究に活用できる施設の必要を、私も「対馬新聞」に書いたものだが、昭和四〇年代のはじめ、杉原致（対馬評論社長）より宗家文庫資料館建設の構想が提案され、私たち（対馬の自然と文化を守る会）にも賛同を求められたが、それを断つたのは、補助金と寄付金で館の建設は可能でも、その後の運営に問題があったからである。

また厳原町教育長（島居伝）の談として、「宗家文庫の維持管理が困難なら長崎図書館に寄贈されたらどうだろう」と新聞に出て話題となったが、これには宗氏（武志侯）が不快を示されたという。このようなとき、対馬の美術調査で島内を廻った谷口鉄男九州大学教授が、

対馬の文化財はゆくに博物館を一館建設するに足る

と語られたことが新聞に出て、これで大きな弾みがついた。

これより県立博物館の分館を誘致することに論議を絞り、「自然と文化を守る会」の運動を展開した。会長古藤満（厳原協立病院長）と、事務局長松原孝雄（対馬町村会事務局長）

と、委員阿比留嘉博と小生が、国府章県議の紹介で、県当局と県議会に陳情したのは昭和四八年（一九七三）九月であった。県はその対応に、知事の諮問機関を置いて検討が進められ、県議会文教委員も揃って調査に来島された。

同じ頃、佐世保市と島原市からも博物館建設の陳情があったことから翌年、諮問委員会は三者を同時に呼んで、同席で詳しい趣旨説明を要求された。すなわち陳情の競演である。

一番に佐世保市の陳情説明があり、続いて対馬の番になったので、古藤会長より陳情の主旨を述べ、私から宗家文庫を主に、島内文化財の状況を説明し、阿比留より博物館を必要とするゆえんを力説した。結果は対馬の勝利で、翌五〇年度県予算に調査費が計上された。

同年、文化庁より山本調査官が来



島。国と県と地元の協議により、名称は博物館でなく資料館とされ、五一年度に建設、五二年度に準備、五三年度に開館と決定した。名称が資料館と

改められたのは、財政の都合により規模が縮小されたのである。

五〇年度末、私は研究に専念するため教職を辞し、その退職金により島内・島外（日本・韓国・中国）を自由に探訪して見聞を博める機会をえたが、年明けて五二年正月、長崎県立対馬歴史民俗資料館準備委員を仰せ付かり、間もなく建築が完成する館へ収蔵する品目の選定と、それを収蔵する予約を取付ける役を一人で負った。

最大の仕事は、館の目玉となる宗家文庫の収蔵に関する宗氏との交渉で、これには「対馬町村長会」に御苦勞をお願いした。先ず六町村を訪問して資料館建設の意義を説明し、宗家文庫に関する件（永久寄託とそれに対する報酬）の了解をえて、町村長会長安藤恵（峰町長）、地元厳原町長主藤孝、自然と文化を守る会会長代理阿比留嘉博に頼み、宗氏と折衝のため、千葉県柏市まで御足勞を願った。

この時宗さんは、「文庫の資料は対馬の物なので、対馬にあげるが、県にやるのではない」と言われ、それに「私が貰う分もあるでしょう」と言われたそうで、「永久寄託」ということで折合いが付き、翌五三年夏、宗さんが九州へ出張して来られた機会に、県教育委員会の辻寛文化課長と私と阿比留が九重の山荘に向いて、本交渉の形式で約定した。

かくして宗家文庫を収蔵し、秋に開館式を無事に終えたが、このとき県教育委員長山田治助氏は式辞のなかで

一県一館といわれる県立資料館を、長崎県が対馬に建設したのは、それにふさわしい資料が対馬にあるからだ。

と述べられた。これは嬉しかったが、式の後で元県教育長速水雄吉氏より「永久寄託」ということの法的根拠は、と質されて返答に窮し、自身の無知を思い知らされた。これは法規に疎い私が、長州毛利家の文書を寄託されている山口県文書館を視察したとき、毛利家文書が県への寄贈ではなく、永久寄託だと聴いたときから、これを「一つ覚え」に思い込んだもので、それが宗氏の思惑とも一致したものと満足していた。

それが今になって残念に思うことは、もしあのとき宗氏より県へ寄贈されることにして、「ただし対馬より外には出さない」と確約していたら、県から疎まれることもなく、武志侯亡き後に起った宗氏との確執もなかったろうにと、またあのとき対馬の分と「宗氏所有の分」を明記していなかったことなど、武志侯を偲びながら悔やまれることがある。

朝鮮通信使四〇〇周年 県立対馬歴史民俗資料館三〇周年 特別企画展

「対馬にのこる日韓交流の礎」

平成十九年（二〇〇七）は、江戸時代、第一回の朝鮮通信使が慶長十二年（一六〇七）に来日してから、ちょうど四〇〇年の節目の年にあたる。これを記念して、朝鮮通信使に関する資料を中心に特別企画展を開催した。

ここでは、朝鮮通信使について簡単に説明しながら、特別企画展の様子を紹介したい。

一 朝鮮外交における対馬

天下統一を果たした豊臣秀吉は、次に中国（明）の征服をもくろみ、その足がかりとして隣国である朝鮮国に大軍を派遣した。文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）と呼ばれるこの戦乱は、朝鮮の人びとを苦しめ、日朝間の国交が断絶してしまう結果となったことはよく知られている。

対馬島主十九代の宗義智は、小西行長とともに日本軍の先鋒として朝鮮へ渡った。義智に対しては五〇〇

〇名の出兵が命じられたことが記録にみえる。（実際に派兵されたのは二五〇〇〜三〇〇〇名程度）それまで朝鮮との交易のなかでつちかかってきた交渉の能力を、戦争の遂行のために用いらざるを得なかったのは、宗氏の本意とするところではなかったであろう。

また、対馬は兵力を供出するのみならず、大陸派兵の兵站基地としての機能を備えていった。府中（現在の厳原）には清水山城が築かれ、上対馬の大浦や鰐浦には諸大名らによって物資を集積するための蔵が設置された。おびたしい数の人や物が対馬に集まり、そして朝鮮へ渡海した。対馬の人びとも従軍し、また船や物資の供出などにも耐えなければならず、前後七年にわたる戦乱は、対馬にも大きな傷跡を残したのであった。

朝鮮への渡口である鰐浦の沖にある海栗島には、ある不思議な話が残っている。朝鮮人の男女の幽霊があらわれるというもので、男は矛を持って立ち、女は泣き叫びながら歩きまわるといふ。のちに府中の八幡宮で七日間にわたる祈禱や、府中や郡の境での祓いなどをおこない、ようやく怪異はおさまった。『津島紀事』こうした戦

争にかかわる説話の存在は、当時の対馬の人びとが誰よりも戦争の被害をうけた朝鮮人のうらみ・嘆きを実感していたことを示している。



海から見た鰐浦湾（上対馬町）

二 通信使来聘までの道のり

朝鮮派兵時に日本軍の最前線にあつた宗義智は、秀吉の死去にともなう撤兵によって、いち早く朝鮮国との和議に奔走する。秀吉のあとをうけた徳川家康は、朝鮮との関係修復を希求したのである。

政権交代を機に講和路線をとる日本側に、朝鮮国も徐々に態度を軟化させていくが、それでも真意をはかりかねていた。戦争終結後あまり時間がたつておらず、また日本の政情も不安定だったことが、朝鮮国の不信につながった。そこで朝鮮国は松雲大師（僧・惟政）

らを日本に派遣することで、政情の探索と国交回復の意思を確認した。漢文に優れた僧侶が政治・外交に携わることが珍しいことではなかった。

さて、こうした交渉を重ねるなかで、朝鮮国は講和の条件として、日本から先に国書を送ることをあげる。徳川政権にとって、先の戦争は敗北ではなく、戦乱を収束させ日朝関係の修復に尽力したとの認識から、朝鮮側の条件をのむことは難しかった。そこで、これに応えるために宗氏は、国書の偽造・改竄をおこない、ついに慶長十二年（一六〇七）に、朝鮮通信使の来日がなつたのである。

通信使の招聘にこぎつけた宗氏は、つぎに朝鮮との貿易再開に着手した。戦乱によって疲弊した対馬を救う手段として、朝鮮貿易が望まれたのである。慶長十四年（一六〇九）に結ばれた、いわゆる「己酉約条」によって、対馬宗氏は貿易を再開することとなる。このときに得た朝鮮貿易の権益は、江戸時代に「十萬石以上格」であつた対馬藩の繁栄を築く基盤となつたことはいままでもない。

三 朝鮮通信使と対馬藩

江戸時代には、慶長十二年度を含め十二回の通信使来日を数える。はじめの三回こそ、披慮人（朝鮮から連行してきた人びと）の刷還（送還）を目的とする、政治的色合いの濃い使節であった。しかし、国際環境が安定するとともに、その様相も変化しはじめた。明暦度以降は將軍襲職の祝賀のために招聘され、次第に祝祭的な性格を帯びるようになってくる。異国との接点をもたなかった当時の庶民にとって、町を練り歩く朝鮮通信使の姿は好奇心をかきたてるものだったのか想像にかたくない。

●江戸時代の朝鮮通信使

和暦	西暦	目的
慶長十二	一六〇七	修好、回答兼刷還
元和三	一六一七	大坂平定、回答兼刷還
寛永元	一六二四	家光襲職、回答兼刷還
寛永十三	一六三六	泰平祝賀
寛永二〇	一六四三	家綱誕生、日光山致祭
明暦元	一六五五	家綱襲職、日光山致祭
天和二	一六八二	綱吉襲職祝賀
正徳元	一七一〇	家宣襲職祝賀
享保四	一七一九	吉宗襲職祝賀
延宝四	一七四八	家重襲職祝賀
宝暦十四	一七六四	家治襲職祝賀
文化八	一八一〇	家齊襲職祝賀

対馬藩は使節の来日要請にはじまるさまざまな準備を取り仕切った。一回の通信使の往復には半年から一年の月日を費やした。通信使は宿泊地や休息地で、大名や幕府役人の接待を受けながら、將軍の居所である江戸を目指したのである。その道中には、学者・文人や民衆も含めた各層の人々とのあいだに交流の機会が持たれた。今も日本各地に朝鮮官人による墨蹟や画が残っている。

また、対馬藩では、儒者を中心とする知識層の獲得・養成に力をいれるようになる。朝鮮語に通じ「誠信の交わり」を主張した雨森芳洲など、数多くの有能な人材を輩出した。朝鮮通信使の来聘は、藩の威信をかけた一大イベントであった。

おわりに

二〇〇七年は朝鮮通信使来日四〇〇周年ということで、日本・韓国の各地で記念イベントが開催された。本特別展でも、七月二十一日のオープニングセレモニーを皮切りに、九月二日の展示最終日まで約一ヶ月半のあいだに、多くの方々を訪れていた。それだけ朝鮮通信使という事象が一般的になった証しであろう。

館蔵品紹介

朝鮮国信使絵巻

紙本着色 卷子装 二巻

第一巻 三八・五×七九九cm

第二巻 三八・五×九四四・六cm

（長崎県指定有形文化財）



対馬歴史民俗資料館では、「朝鮮国信使絵巻」を二種所蔵しているが、上図はそのうちのひとつ。対馬藩主宗家に伝来したもので、昭和五十四年（一九七九）に宗武志氏より当資料館へ寄託され、のち県が購入したという経緯をもつ。

題も年号も確認されないが、他に残る行列絵巻よりも比較的古い時期に作成されたものと思われる。

絵巻は二巻に分かれており、乗輿する正使や朝鮮国書を載せた轎、警護にあたる対馬藩士の姿まで、五〇〇名以上の人物が丹念に描き込まれている。その筆致から、狩野派の絵師の手によるものと言われている。

通信使来聘の実務的な部分を一手に担った宗家の旧蔵品という由緒からも、本絵巻が一級資料であることは間違いない。

対馬聖人陶山訥庵先生生誕三五〇周年記念関連資料展

「わが死後に農政のおこなわれるならば霊位に向かつて告げよ」

これは、訥庵先生最後の直筆「受益談」の言葉です。（『陶山訥庵先生小伝』賀島由己著より引用）

訥庵先生は、「受益談」後、口述により農業書を著しました。

最後の口述書が「続増田開地記」です。末尾に、記された遺言が次の言葉です。

「農作の事に病を力め書を著せり、農政の行わるる時は国家永久の道の在る所にして、永久の



『老農類語』
訥庵先生著書

『老農類語』は、対馬の農業の上手な老人から聞いて作った十二種類の農産物の農業指導書で、島内八郷に配布しました。訥庵先生は農業による対馬の自給自足を夢見ていました。国境の島国である対馬にとって、それは自活への最大の条件でした。

訥庵先生が死後「農聖」と言われ、農民から敬愛されたゆえんです。

陶山訥庵先生略年表

和 暦	西 暦	できごと
明暦3	1657	11月28日 巖原金石に生まれる。
寛文7	1667	木下順庵の門に学ぶ。（～寛文11年まで）
延宝5	1677	遊学を終え、対馬に帰る。
延宝8	1680	家督を継ぐ。
貞享2	1685	『宗氏家譜』を編集する。
元禄8	1695	竹島問題（現在の鬱陵島）が解決する。
元禄11	1698	9月 界川（境川）の論争の解決のため、久留米に行く。
元禄12	1699	3月 郡奉行を仰せつけられる。
元禄13	1700	10月 穢猪谷が発せられる。 12月 逐詰が始まる。
宝永2	1705	鉄砲屋を設け、鉄砲の製造に着手する。
宝永3	1706	窮民屋を設け、身寄りのない病人や老人を救う。
宝永5	1708	郡奉行を免ぜられた。 6月 用人を命ぜられ、3ヶ月で退任。
宝永6	1709	対馬南端の豆敷の逐詰をもって、猪狩りが終了する。
正徳元	1711	『 <small>※註3</small> 鉄砲格式倣議条目』を著す。
享保7	1722	5月『農業全書約言』を、 10月『老農類語』を八郷に配布する。
享保9	1724	『甘藷説』『粟孝行芋植豆下知覚書』を著す。
享保12	1727	『郷村農事録』『農書輯略』『農政問答』を著す。
享保16	1731	『受益談』を著す。
享保17	1732	6月24日 死去する。 佐護金倉壇に「曠古遺愛」の碑が農民によって建てられる。

訥庵先生死後の先生に関する主なできごと

和 暦	西 暦	できごと
天保3	1832	訥庵死後 100 年祭が行われる。
天保6	1835	唐坊長秋の『陶山訥庵事状』（順則伝）が編集される。
文久3	1863	藩より成功神の神号が送られる。 浅茅湾沿岸で練兵が行われた。
大正元	1911	訥庵会が組織された。
大正13	1924	正五位が追贈された。

（『陶山訥庵先生小伝』より）

道の障わりは農政の行われざるに在るべしと自深く思い入りける故なり」（『対馬島誌』より引用）

まさに、訥庵先生は一生を対馬のために捧げたと言えます。

平成十九年は、訥庵先生生誕後、三五〇年に当たります。折しも、現在、対馬は、訥庵先生の猪鹿逐詰と同じ猪被害の悩みを抱えています。そこで、猪被害を島全体で考えることを目的とする「対馬聖人陶山訥

庵先生生誕三五〇年祭」が行われるに際し、関連資料展を十月十六日から十二月九日まで本館第一展示室で開催しました。

関連資料展では、猪鹿退治（猪鹿逐詰）や竹島（現 鬱陵島）領土問題の解決、※註1窮民屋の設置・運営や※註2生子麦制などの資料、そして彼が著した百二十冊以上の著作の中から二十冊ほどを展示しました。島内外からの来館者に、訥庵先生の対馬を愛する熱い思いと猪退治などの業績に触れていただくとともに

に、島内で増えつつある猪の害について考えていただくことができました。

本展を開催するに当たり、対馬聖人陶山訥庵先生生誕三五〇年祭実行委員会・対馬市教育委員会・修善寺など多くの関係者・関係機関に資料を出陳していただいたことに対し、厚くお礼申し上げます。

（注釈）

※1 一人暮らしの貧しい人への対馬藩

独自の救済制度

※2 子どもを対象とする福祉制度

訥庵先生自警歌廿首より抜粋

人をねたみ(妬) 身をほこるこそ(誇) いやしけれ(卑) 身のため人のためハおもハで(思)

ねたみほこる(誤) ゆへハたかきを(故) このむなり(高) たかきをこのミ(好) いやしくそなる(卑)

あやまりをしれる後にも(知) あらためす(改) かさりぬるこそ(飾) おろかなりけれ(愚)

[出 陳 目 録]

(掛軸)			
「陶山訥庵先生肖像」	… 1幅	修善寺	蔵
「陶山訥庵先生肖像」(模写)	… 1幅	個人	蔵
「自警歌廿首」※左掲(絵巻)	… 1幅	修善寺	蔵
「陶山訥庵先生絵巻」(書籍)	… 1巻	個人	蔵
『大古 御馬廻御奉公帳』	… 1冊	本館	蔵
『口上覚書 乾』(上巻)	… 1冊	本館	蔵
『口上覚書 坤』(下巻)	… 1冊	本館	蔵
『毎日記〔御郡奉行所〕(元禄13年)』 「(猪鹿逐詰ニ付) 陶山庄右衛門・平田類右衛門 口上覚」	… 1冊	本館	蔵
『陶山先生言行録』(別名『陶山先生事記』)	… 1冊	本館	蔵
『津島紀略』	… 2冊	本館	蔵
『対馬郷村帳』	… 1冊	本館	蔵
『水屋荒瀬境川・大川筋上荷船 両条記録』	… 4冊	本館	蔵
『水屋荒瀬境川内談記録』	… 5冊	本館	蔵
『水屋・荒瀬 境川一件内談記録』	… 1冊	本館	蔵
『農政問答』	… 1冊	本館	蔵
『伊奈郷農事録』	… 1冊	本館	蔵
『陶山先生事状』(別名『順則伝』)	… 1冊	本館	蔵
『農業全書約言』	… 1冊	本館	蔵
『宗氏家譜』	… 1冊	本館	蔵
『陶山先生記録』(神山祝文…)	… 1冊	本館	蔵
『鉄炮格式僉議条目』※3	… 1冊	本館	蔵
『民事紀聞』	… 1冊	本館	蔵
『陶山・賀嶋 竹嶋往復書』	… 1冊	本館	蔵
『老農類語』	… 2冊	本館	蔵
『受益談』	… 1冊	本館	蔵
『剣学必要』(器物)	… 1冊	本館	蔵
火繩銃	… 2筒	本館	蔵
イノシシの牙 等	… 8個	市教委	蔵



陶山訥庵先生自警歌 (掛軸)

※3 鉄炮格式僉議条目

訥庵先生の深慮遠謀

訥庵先生の死後131年後の文久3年(1863)に浅茅湾沿岸で、練兵(軍事訓練)が行われました。そのとき、藩が参考にしたのが、訥庵先生が著した『鉄炮格式僉議条目』です。

この『鉄炮格式僉議条目』は、20項目に分けて書かれており、第18項目の「郷村の鉄炮にて変に应ずる仕形の事」が参考にされたのです。

第18項目より一部を抜粋し、現代表記に換え紹介します。

「賊船侵し来り候段相知れ候はば、野山の働きを仕居候男女皆々村に帰り、村中の婦女并十六七八九の男子、六十一二六十三四の老人は、其村の極老、小児、病身、片輪と、当用穀物、衣服を牛馬に乗せ、又は面々の背にも負ひ、賊船の侵し来り候後の村に立退き、鉄炮を持たる者共は火打袋と玉菓の早込みを頭に掛け、玉菓の入たる竹の筒を背に掛け、鉄炮に当分の食物を包み候物を結び付け候て肩に掛け、餘計の火繩は結び候て腰に付け、浦の左右の山兼て極め置き候要害を早速に持堅め申す可き候、鉄炮を持申さず者は、大麦粉并蕎麦粉を袋に入れ、其身と鉄炮を持つたる二人と合て三人分の簑笠を一つに結び付け候て背に負ひ…」

期間中の入館者数

小学生	86人
中学生	13人
高校生	2人
一般	9,752人
合計	9,853人

地区別入館者数

島内	321人
島外	2,118人
国外	7,414人

対馬歴史民俗資料館「館報」総目録

第二十一号、第二十二号、第二十三号

◇第二十一号 (平成十年三月二十日) 館長あいさつ (開館二十周年記念事業)

・中村 仁志

丹羽正伯と『諸国産物帳』

—『下書対州産物絵図』(御国控)の発見—

藩校日新館

—対馬藩の教育—

半井桃水書状

—対馬藩のこと—

開館二十周年記念事業メモ

『対馬歴史民俗資料館館報』総目録

(創刊号、第二十号)

短通

◇第二十二号 (平成十一年三月一日)

館長あいさつ (国府平の館)

天明初年対馬の天気

ペリー来航と対馬

『奉公帳人名簿』をつくる

寄贈民俗資料・密造酒蒸留装置

文書修復作業

◇第二十三号 (平成十二年三月一日)

館長あいさつ (豊饒の歴史いま)

元禄十六癸未年鰐浦沖破船訳官船

金石城櫓門の焼失

大船越瀬戸の開削

「一紙物」調査進む

朝鮮通信使特別史料展を開催

韓国からの来館者急増

◇第二十四号 (平成十三年三月一日)

表紙解説

館長あいさつ (二十一世紀に生かして)

宗家文庫史料にみる安政朝鮮通信使

伊能忠敬の対馬測量

府中絵図屏風レプリカが完成

小川家文書寄贈を受ける

古文書解説講座を実施

表紙解説

◇第二十五号 (平成十四年三月一日)

浅茅滔々

対馬藩の元禄国絵図について

宗家文庫史料にみる朝鮮通信使

—大坂易地聘礼の挫折を追う—

江戸時代の東アジアがみえる

表紙解説

宗家旧蔵「為政以德」(木印)

と図書印のレプリカ作成

宗星石山水画の寄贈を受ける

「宗家文庫史料」寄託の

宗家中正氏当館を訪問

平成十三年度古文書解説講座

◇第二十六号 (平成十五年二月十五日)

館長あいさつ (誠信之交隣)

加嶋兵介の足跡を追って

対馬と地震

対馬藩主「宗義成」(宗家二十代)

—方松院の創立と義成の思い—

古文書の保存について

「対馬神道」史料の寄託を受ける

資料の寄贈を受ける

◇第二十七号 (平成十六年二月二十日)

館長あいさつ (温故知新)

「宗家文庫史料」一括購入が実現

江戸時代の対馬のくらしを語る

—宗家文庫史料による天気調査を通して—

小山満信・松島修二・中山弘之・河合徹

古文書の保存について

対馬歴史民俗資料館入館者状況

平成十五年度古文書読み方講習会

中学生のための「郷土の歴史散策講座」

社会科見学や

総合的な学習の時間への対応

資料の寄贈を受けました

◇第二十八号 (平成十七年三月一日)

館長あいさつ (雨森芳洲先生の

江戸時代の対馬のくらしを語る

—海の恩恵をうけた人々—

小山満信・松島修二・河合徹・大森公善

雨森芳洲先生没後二五〇年祭特別展開催

平成十六年度企画展コーナー

江戸時代の対馬の漁業展

朝鮮通信使

コーナー

半井桃水コーナー

対馬の

民具展

来館者アンケートを実施

対馬歴史民俗資料館入館者状況

平成十六年度古文書読み方講習会

中学生のための「郷土の歴史散策講座」

開講

新企画・高校生の「郷土の歴史散策講座」

開講

小・中学校の社会科見学

総合的な学習の時間等への対応

資料の寄贈を受けました

◇第二十九号 (平成十八年三月一日)

館長あいさつ (日本海海戦から百年

「友好と平和」

長嶋 耕一

江戸時代の対馬のくらしを語る

—温もりある対馬藩の施策—

小山満信・松島修二・大森公善・俵公一郎

宗家文庫史料・一紙物(書簡類)調査状況

対馬歴史民俗資料館ホームページをリニューアル

平成十七年度企画展コーナー

日本海(対馬沖)海戦一〇〇周年企画展

対馬にのこる江戸・明治時代の絵図展

対馬古文書を読む会活動開始

対馬歴史民俗資料館入館者状況

平成十七年度古文書読み方講習会

中学生のための「郷土の歴史散策講座」

開講

高校生の「郷土の歴史散策講座」

開講

小・中学校の社会科見学

総合的な学習の時間等への対応

資料の寄贈を受けました

◇第三十号 (平成十九年二月二十日)

館長あいさつ (農政陶山訥庵「庄右衛門」

生誕三五〇年)

長嶋 耕一

「猪鹿逐詰之次第」にみる

陶山訥庵の猪狩り

俵 裕一

日朝の橋渡し

通信使を支えた対馬藩

小山 満信

史料 対馬志士小宮延太郎伝

大森 公善

平成十八年度企画展コーナー

陶山訥庵展

朝鮮通信使展

対馬にのこる焼物展

絵図展

絵図から見える

対馬

平成十八年度の主な活動報告

資料の寄贈

平成十九年度
企画展

対馬にのこる
日韓交流の礎

本企画展は、「江戸時代以前の対馬と朝鮮国とのかわり」、「江戸時代第一回の使節を迎えるにあたって」、「『宗家文庫史料』にみる通信使」、「通信使ゆかりの地・人物」の四つのテーマから構成し、朝鮮通信使との交流に対馬が果たした役割や交流による文化的な意義を中心に日韓交流を紹介しました。



朝鮮国信使絵巻（宗家寄贈）などの展示
開催期間 7月21日（土）～9月2日（日）

【開催期間中の来館者数】
島内（三三八名）島外（七〇五六名）
合計 七四二四名

対馬出身者
遺作書画展

近世から近代にかけての対馬出身者の書画などを集め、展示しました。宗家第三十四代島主重望公（宗星石）をはじめ、関野益友、古森半佛子の作品や戦後対馬の美術界をリードした津篤郎氏の作品など掛軸を中心に紹介しました。掛軸の中には歴代藩主の書をまとめたものもあり貴重な対馬の財産を展示することができました。本展示のためにご協力くださった方々に改めて感謝申し上げます。



宗星石の掛軸と古森半佛子のお盆などの展示
開催期間 9月8日（土）～10月12日（金）

【開催期間中の来館者数】
島内（二一〇名）島外（四三三七名）
合計 四四四七名

陶山訥庵先生
関連資料展

対馬聖人の一人に称される陶山訥庵（庄右衛門）が、明暦三年（一八五七）に対馬府中（現在の厳原）に生まれてから今年でちょうど三五〇年を迎えました。本企画展では、陶山訥庵の生涯を時代ごとに紹介し、特に評価の高かった「猪鹿逐詰」のようす、またその他の数々の政策、晩年に遺した多くの著作をその内容も含め展示し、その偉業に学ぶとともに今後の農政のあり方について投げかけました。



農政に関する著書の展示
開催期間 10月16日（火）～12月9日（日）

【開催期間中の来館者数】
島内（三二一名）島外（九五三二名）
合計 九八五三名

なつかしい対馬展

宮本常一は明治四十年（一九〇七）に山口県大島郡の農家に生まれ、師範学校の時に柳田国男を知り、民俗学を始めました。彼は徹底して自分の足で歩き、さまざまな角度から調査、研究を行いました。本企画展では、宮本常一が対馬で行った調査の内容をとおして、昭和の対馬のようすや彼とゆかりのあった人物について紹介しました。

開催期間
平成20年1月24日（木）～3月9日（日）

表1 平成19年入館者数

成人	一般入館者		計	研究入館者	総計
	小中高生				
	一般見学	その他の見学			
41,057	808	555	42,420	134	42,554

表2 平成19年地域別一般入館者数

島内	島外					総計
	九州	関西	関東	東北・北海道	外国	
1,619	2,511	2,671	4,010	357	30,697	41,865

※ 無回答689名をのぞく

講座名	実施日及び期間	参加人数	内容
古文書読み方講座	7月26日～10月4日	のべ109名	正徳元年江戸期第8回の朝鮮通信使の様子と朝鮮国との外交に尽力した雨森芳洲の履歴についての読み下しと朝鮮通信使の歴史的な背景について学習した。
中学生のための郷土歴史散策講座	8月23日	27名	日本の歴史と対馬の歴史を対比した古代から近代までの概説と宗家文庫史料の朝鮮通信使に関する古文書の読み合わせを行い、朝鮮通信使にゆかりのあるお使者屋、万松院、西山寺などを散策した。
高校生出前歴史講座	12月17日	100名	古代から近代までの対馬の歴史を資料等を交えて講話を行った。
古文書自主講座	毎月第1土曜日	のべ55名	昨年度に引き続き宝永七年の「毎日記」(宗家文庫史料・表書札)の読み合わせを行った。
出前歴史講座	6月12日 7月4日 7月25日 10月29日 11月7日 11月14日 12月13日 12月14日	のべ126名	6/12 7/4 久田小学校で対馬の歴史についての講話。 7/25 金田小学校の教職員を対象に金田校区の史跡(歴史)と伝承についての現地研修。10/29 11/7 12/13 佐須奈小学校で陶山酒庵の猪鹿逐話についての講話。11/14 北部小学校で陶山酒庵についての講話。12/14 内院小学校で身近な地域についての学習。

平成十九年度の主な活動報告

社会科見学・出前歴史講座

平成十九年度も小学生の社会科見学や中学生の「総合的な学習の時間」を利用してたくさんの方々が来館がありました。それぞれが目的をもってしっかりと学習することができました。また、今年度は出前歴史講座の依頼が多く、対馬のことをより多くの場で、より大勢の人に伝える機会があつたことは、大変有意義でした。

継続的な活動

今年度も宗家文庫史料一紙物(書類)調査を継続して行いました。さらに、今年度から新しく冊子物(日記や記録類)再調査も始まり、計画的・継続的に調査を行っています。また、従来からおこなわれている古文書修復作業・古文書のデジタル化に向けた作業なども日常の活動として行っています。

今年度は、対馬歴史民俗資料館開館三〇周年という節目の年を迎えました。今までの三〇年間の取り組みを基に、対馬の歴史や文化を担い、情報を発信する施設として、新たな一歩を踏み出す時でもあると考えています。今後とも当資料館を大いに活用していただき、また、ご支援ご協力をお願いいたします。

各学校に出かけ実施した出前講座では、楽しそうに話を聞いていました。



9月から11月にかけて多くの学校から大勢の小中学生が来館し、真剣に学習を深めていました。

今年度の「古文書読み方講座」は、朝鮮通信使を題材にした古文書の解説をおこないました。



対馬歴史民俗資料館
入館案内
開館時間 入館料無料
9:00～17:00
休館日 毎週月曜日
(但し祝日の場合は翌日)
TEL/FAX 0920(52)3687
http://www.pref.nagasaki.jp/t_reki/

- 館長 大森 公善
- 課長(学芸員補) 松村 義弥
- 学芸員 山口 華代
- 学芸員補 俵 裕一
- 研究員 日高千代乃
- 史料調査補助員 椎葉 徳子
- 史料調査補助員 鋪田みどり
- 史料調査補助員 権藤 安子

平成十九年度職員

- * 國分 英俊氏 (対馬市在住) 絵図 屏風など
- * 高瀬 豊氏 (福岡市在住) 壺、時計など
- * 本田 和男氏 (対馬市在住) 絵図
- * 原田 善紀氏 (対馬市在住) 写真
- * 棧原久之助氏 (対馬市在住) 炭焼き釜模型
- * 吉武 義洋氏 (佐賀市在住) 刀剣
- * 小田 恒子氏 (対馬市在住)

資料の寄贈